

# 同一鹹味御書

弘長元年 四〇歳

夫味に六種あり。一には淡、二には鹹、三には辛、四には酸、五には甘、六には苦なり。百味の肴膳を調ふといへども、一つの鹹の味なければ大王の膳とならず。山海の珍物も鹹なければ気味なし。大海に八の不思議あり。一には漸々に転深し、二には深くして底を得難し、三には同じ一鹹の味なり、四には潮限りを過ぎず、五には種々の宝蔵有り、六には大身の衆生中に在って居住す、七には死屍を宿めず、八には万流大雨之を収めて不増不減なり。

漸々に転深しとは、法華経は凡夫無解より聖人有解に至るまで、皆仏道を成ずるに譬ふるなり。深くして底を得難しとは、法華経は唯仏与仏の境界にして、等覺已下は極むることなきが故なり。同じ一鹹の味とは、諸河に鹹なきは諸教に得道なきに譬ふ。諸河の水大海に入って鹹となるは、諸教の機類法華経に入って仏道を成ずるに譬ふ。潮限りを過ぎずとは、妙法を持つ人寧ろ身命を失すとも不退転を得るに譬ふ。種々の宝蔵有りとは、諸仏菩薩の万行・万善・諸波羅蜜の功德妙法に納まるに譬ふ。大身の衆生所居の住处とは、仏菩薩大智慧あるが故に大身衆生と名づく。大身・大心・大莊嚴・大調伏・大説法・大勢・大神通・大慈・大悲おのづから法華経より生ずるが故なり。死屍を宿めずとは、永く謗法一闡提を離るゝが故なり。不増不減とは、法華の意は一切衆生の仏性同一性なるが故なり。

蔓草漬たる桶餅の中の鹹は、大海の鹹に随って満干ぬ。禁獄を被る法華の持者は桶餅の中の鹹の如く、火宅を出で給へる釈迦如来は大海の鹹の如し。法華の持者を禁むるは釈迦如来を禁むるなり。梵釈四天も如何驚き給はざらん。十羅刹女の頭破七分の誓ひ、此の時に非ずんば何の時か果し給ふべき。頻婆娑羅王を禁獄せし阿闍世、早く現身に大悪瘡を感得しき。法華の持者を禁獄する人、何ぞ現身に悪瘡を感ぜざらんや。

日 蓮 花 押